

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 11 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320055

研究課題名（和文）古代幼学書の総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study on Ancient Textbook

研究代表者

黒田 彰（KURODA AKIRA）

佛教大学・文学部・教授

研究者番号：80178136

研究成果の概要（和文）：古代幼学は、現在の初等教育に該当するもので、八～十歳位の子どもを対象とする。文字の習得など、仏教布教の一環として行われ、結果的には、個人のみならずその時代の文学の基盤を形成した。本研究は、これまで体系的な検討が殆ど行われてこなかった幼学書であり、幼学の会が蓄積してきた孝子伝、列女伝などの文字テキストの研究成果受け、主として文字テキストの図像化の問題を究明するものである。また、それらが、古代中世文学の基盤をなした、裾野の広がりがいかなるものであったかについても、併せて考察するものである。

研究成果の概要（英文）：Study for young in ancient is corresponds to primary education today, and targeting about 8-10 years children. Contents of this education were learning characters and others. It had took place as part of propaganda of Buddhism, and more important, based the formation of personal and social environment of literature.

This kind of study has not ever tried systematically.

In this research, we、Yougaku-no-kai, ascertain how images were made under the influence of texts. For this purpose, we studied the texts of *Accounts of Filial Offspring*, *Accounts of Outstanding Women* and others, and intend to consider forming the basis of ancient and medieval literature.

交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費       | 間接経費      | 合計         |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2010年度 | 5,500,000  | 1,650,000 | 7,150,000  |
| 2011年度 | 4,000,000  | 1,200,000 | 5,200,000  |
| 2012年度 | 3,900,000  | 1,170,000 | 5,070,000  |
| 年度     |            |           |            |
| 年度     |            |           |            |
| 総計     | 13,400,000 | 4,020,000 | 17,420,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：孝子伝(図)・列女伝(図)・文献学・図像学、日中比較文学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の黒田をメンバーに含む、幼学

の会(後藤昭雄、三木雅博、山崎誠など)は、古代幼学の中核をなす、四部の書・三注(四部の書=千字文、もしくは新樂府・百詠・和漢朗詠集、三注=千字文注・蒙求注・胡曾詠史詩注)の中から、千字文注や和漢朗詠集注、また、我が国で作成された幼学書の口遊・仲文章などの注解に取り組んできた。その流れを受けて、文字テキストだけではなく、図像を伴う、孝子伝・列女伝の文字テキストの解明と、豊富に残される図像資料とテキストの関連の追究を主な内容とする研究を推進することとした。このため、研究の範囲は、文字テキストを対象とする文献学のみならず、図像を考察の対象とする図像学をも含むものとなった。

## 2. 研究の目的

本研究の具体的な目的は、以下の通りである。

〈1〉古代幼学としての列女伝と列女伝図の研究

a 司馬金竜墓出土木板漆画屏風の研究

b 和林格爾後漢壁画墓の研究

c 列女伝の研究

d 列女伝図の蒐集、整理と刊行

〈2〉孝子伝図の研究

a 孝子伝図集成(国際版)の公刊

b 新出孝子伝図の研究

c 武氏祠画像石の研究

〈3〉海外の幼学研究との連携

a 「海外の幼学研究」の続刊

b 海外共同研究者との学術交流及び、共同研究、研究発表などの実現

c 海外の幼学資料調査

〈4〉古代幼学研究の新領域の開拓

〈5〉日本文学における幼学の役割の研究

〈1〉は、全く未開拓の分野である列女伝図

の蒐集と整理を目的とし、将来的には全ての関係資料の公刊を目差すものである。a は孝子伝・列女伝テキストを用いた榜題・題記の面の注解を通じ、司馬金竜墓出土屏風の内容を総合的に解明しようとするもので、一応の注解原稿が完成している。〈2〉c 武氏祠画像石の研究成果の付編とする予定で、現在〈2〉c の注解を遂行している。c、d については、4 研究成果の欄において成果を述べる。〈2〉は、従来の孝子伝、孝子伝図の研究をさらに充実、確かなものとするを目的とする。b は、今後とも、未知の新資料の出現が大いに期待出来るので、その情報蒐集と海外との共同研究のネットワークを作ることを心がけた。c は、今次の研究の最も重要な目的となるもので、長廣敏夫氏、巫鴻氏による近時の成果を、最新の資料を用いて一新しようとするものである。それは世界的規模において期待されている成果を生むはずである。〈3〉a、b は〈1〉〈2〉を具体的に推進、実現するための環境作りを目的とする。〈4〉〈5〉が、本研究の最終目的となる。

## 3. 研究の方法

〈1〉〈2〉のテーマは、従来体系的な研究が殆ど行われていないため、特に図像資料について、海外の研究者(特に中国)との連携が不可欠であり(〈3〉)、まず資料の蒐集と整理が必要である。その上で、重要な図像資料の解読(〈1〉a, b, 〈2〉c など)を輪読会形式で推進しつつ、体系的な新研究を目差した成果を、まずは個別的に公表してきた。

〈4〉と〈5〉は、研究のさらなる展開と、日本文学研究への成果の還元を試みたものである。

## 4. 研究成果

〈1〉については、5 [雑誌論文] ⑤「列女

伝の研究(三)」を以って、一応の整理と体系化を終えた。しかし、それは基礎研究の面における成果であって、上記⑤など、三本の論文における知見は、例えば〔雑誌論文〕③「顧愷之前後—列女伝図の系譜—」へ展開、結実する。それは〈1〉aの和林格爾後漢壁画墓の列女伝図の初めての公刊により(『和林格爾漢墓孝子伝図輯録』、2009)、漢代における、前例のない規模を有する列女伝図が確認されたことにより、〈2〉c武梁祠の列女伝図を併せ、列女伝(図)の作者劉向にごく近い時代の列女伝図の様態が知られるに至ったことが大きい。さらに、それらを、これまで孤立的に扱われてきた顧愷之の列女伝図(北京故宫博物院藏列女仁智図巻、清・阮福刊伝顧愷之筆古列女伝挿絵、及び、顧愷之の画風を彷彿とさせると言われる〈1〉aなど)と比較・対照させてみると、顧愷之の列女伝図は、その構図をほぼ忠実に、漢代列女伝に負うことが判明する。このことは、これまで具体的な画風が殆ど知られることのなかった顧愷之の列女伝図の内容を、極めて具体的に明らかにする、大きな成果である。その成果は、北京大学『国際漢学研究通説』4号に公刊され、顧愷之研究に一石を投じるものとなった。その成果が評価され、北京大学国際漢学家研修基地による、研究代表者黒田の招聘に繋がって、2012年3月、北京大学における講座が開かれ(〔学会発表〕①)、孝子伝図と列女伝図の概論を中国において講ずる結果となった(近く、講演原稿の中国語訳が『中国典籍与文化』誌に掲載される)。

さらに〈2〉孝子伝図の研究については、まずb武氏祠画像石の解説・注解が、本研究のメインテーマであることは前に触れたが、現在、幼学の会により、約三分の二の画像の解説を終え、〈1〉aの成果を付編として、『武梁祠画像石注解』(仮題)の公刊に向けた研究

が進行中である。

また、〈3〉海外の幼学研究との連携の成果として、深センの呉強華氏蔵、新出孝子伝図三点の存在を知ったことを上げることができる。従来全く知られることのなかった孝子伝図が、三点も明らかになるのは、極めて異例のことで、幼学の会においては、全ての画像を入手、また、実見、調査もほぼ終了している。そのうち二点の報告論文は、すでに完成、25年度末に、文物出版社から、日本語版、中国語版、英語版併載の報告書が刊行される予定である。

さらに〈3〉の成果として、例えば、寧夏ウイグル自治区固原博物館所蔵、寧夏固原漆棺画について、研究代表者黒田に対し、解説論文執筆の正式依頼があり、原稿は既に完成、中国語訳が進行している。その際、固原北魏墓漆棺画の孝子伝図の現地調査が許可され、従来全く報告されたことのない孝子伝図の数場面の現存が確認出来た。これも〈2〉の大きな成果といえる。幼学の会は、それらの画像資料を入手、検討に入っている。

〈4〉については、〔雑誌論文〕②や、④⑤など、幼学としての敦煌文書の研究を上げることができる。そのうち④は新出の太公家教について、その伝来と系統を考察したもので、偽文書の噂もある李盛鐸旧蔵本について、それが真物であることを具体的な事例を上げて証明した。また⑤は、同じく何彦昇、李盛鐸文書の一つである、未紹介の有鄰館文書を報告したもので、④はその伝来ルートに関する研究である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

①黒田彰 「有鄰館本維摩疏积前小序抄攷—第三十一号「苻堅迎鳩摩羅什事」について—」(佛教大学『文学部論集』97)、査読無、平成25年3月、pp. 1-22

②黒田彰 「抜き取られた敦煌文書—何彦昇、鬯威のことなど・太公家教攷(補三)—」(『京都語文』19)、査読無、平成24年11月、pp. 180-202

③黒田彰 「顧愷之前後—列女伝図の系譜—」(北京大学『国際漢学研究通訊』4)、査読無、平成23年12月、pp. 69-133

④黒田彰 「杏雨本太公家教について—太公家教攷・補(二)—」(『杏雨』14)、査読有、平成23年6月、pp. 234-291

⑤黒田彰 「列女伝図の研究(三)」(『京都語文』17)、査読無、平成22年11月、pp. 97-131

[学会発表] (計3件)

①黒田彰 「孝子伝図和列女伝図概論」、北京大学国際漢学家系列43、44講、平成24年3月15日、22日、北京大学(中国)

②黒田彰 「杏雨書屋本太公家教について—新出〔羽664〕の系統と伝来—」、和漢比較文学会東部例会、平成22年7月24日、早稲田大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

黒田 彰 (KURODA AKIRA)

佛教大学・文学部・教授

研究者番号：80178136

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者

後藤昭雄 (GOTO AKIO)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：80022284

三木雅博 (MIKI MASAHIRO)

梅花女子大学・文化表現学部・教授

研究者番号：70165992

陳齡 (CHEN LING)

愛知文教大学・人文学部・准教授

研究者番号：40333182

### (4) 研究協力者

山崎 誠 (YAMASAKI MAKOTO)